瀬戸内に生きる

医療通じ国際貢献

ソマリアなど難民救援

アジア医師連絡協議会（AMDA）事務局次長

津曲　兼司さん（36）

（岡山市佐山）

「胸は苦しくないですか」「きのう家族は来てくれたの？」。太く、張りのある声が病棟に響く。患者に親しく言葉を掛け、顔をのぞき込む目はにっこり。患者の気持ちがほぐれる。

アジア医師連絡協議会（AMDA）は、アジア十三カ国の医師四百人余で構成。海外で医療ボランティア活動を展開している。津曲医師は事務局次長。AMDAの本部がある岡山市楢津、菅波内科医院の副院長でもある。

一月下旬から約二週間、AMDAのメンバーとして、内戦と干ばつで飢餓に苦しむソマリア難民救援のため、隣接のケニア、ジブチに飛んだ。「病気がまん延している。車を使っての巡回診療などが必要だ。安全が確保されないと難民は帰国できない」。現地の様子が脳裏をかすめる。

千葉県松戸市出身。「卒業、就職という決まったコースを歩むより、自分に合った道を探したい」と、東京外語大を中退し昭和五十四年四月、ケニアに留学。一年半の間、語学や政治、文化などを学んだ。

帰国後、秋田大医学部に入学し、AMDAの前身、全日本アジア医学生連絡協議会に所属。アジアの国々に渡り、医学生と交流を重ねた。平成元年五月、医師になると同時にAMDAに参加。三年の夏、菅波茂代表（四七）に請われて、翌年一月には岡山へ移った。

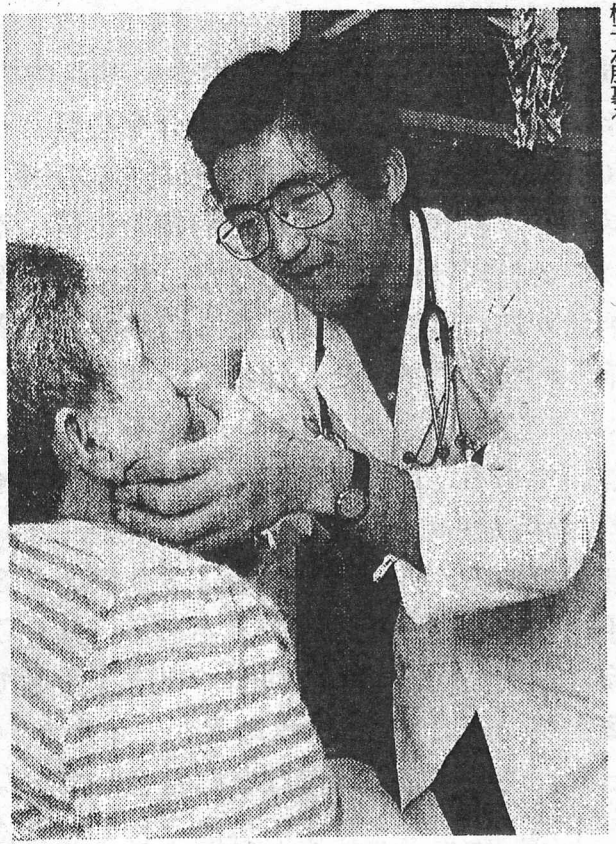
AMDAは昭和五十九年八月の発足以来、戦争や政情不安、災害などに見舞われたアジア、アフリカの約十カ国に医師、看護婦らを派遣した。津曲医師は主に救援プロジェクトの立案などを手掛けている。昨年四月にはミャンマー難民救済のためバングラデシュに出向き、診療や衛生教育に当たった。

「国境という枠は便宜的なもの。枠を引くとすればそれは民族とか国ではなくて、人類だ」。身長一八〇センチ、体重八六キロのがっちりした体格。エネルギッシュな口調に一段と熱が入る。

「自分には技術がない…」。かつてケニアで味わったもどかしさ。そこを原点として、医学の道を選び、医者として日常業務と国際的なボランティア活動に情熱を傾ける生き方は、はつらつとしている。

「助けるというのではない。対等の立場。私たちが海外に行くと、たくさんのものを現地の人々から得られる。その人たちが医師、医薬品がないことで生命が危ぶまれ、病気で苦しんでいるとすれば、何かお返ししたい。それだけ」

医療を掲げた国際貢献。その拠点は岡山であり、目は岡山から世界へと大きく広がっている。



お年寄りを診察する津曲医師